



## NIEの活動と防災・減災教育の取り組み

和歌山県NIE推進協議会会長 和歌山大学教育学部教授 船越 勝

防災や減災の問題を考えると、私には忘れられない2つの光景があります。一つは、1995年の阪神・淡路大震災の際に経験したことです。阪神・淡路大震災は、冬の1月17日午前5時46分に起こったので、まだ外は真っ暗で私は熟睡していました。余りの揺れの激しさに目が覚めました。当時私は奈良教育大学に勤めていました。神戸から離れた奈良市内でも、かなりの揺れで、書斎の本棚がほとんど倒れ、部屋のなかには入り込めないような状況でした。夜が明けてから、報道によって、被災地の惨状を知ることとなりました。その後、当時私の大学・大学院時代の恩師が神戸女子大学に勤めていて、須磨に住んでおられたので、JRや私鉄など複数の路線を乗り継ぐ形で鉄道が復旧したので、何人かの教え子の方と一緒に、須磨まで水などを持って出かけました。そして、特に長田辺りまで来た時に一面の焼け野原の光景に一言も言葉が出ませんでした。これが震災の現実なのだと思ってもって実感させられたのでした。

いま一つは、2011年3

月11日に起こった東日本大震災です。東北地方からは遠く離れているので、もちろん直接の被害はなかったのですが、生活科や総合学習の研究で共同研究をしている教師たちが被災し、困難なかでも学校の再開に取り組んでいたのが、震災後おおよそ1年半の間に、石巻市・女川町、名取市、仙台市若林区の3箇所を3回に分けて訪問しました。最初に石巻市・女川町に行った時は、まだ鉄道も復旧していなかったため、仙台からバスで石巻まで行き、その後は、レンタカーで移動しました。子どもや教職員に大きな被害が出た大川小学校にも行きましたが、まだほとんどそのままの状況でした。大川小学校が立地している場所が北上川の河口から約3.7kmとずいぶん離れたところにあることは、車を運転して行きましたのでよくわかりましたが、津波は川を遡ったのです。また、石巻市の雄勝町はいくつかの学校や役場などを訪問しましたが、海岸線に建っていた小学校は、校舎の4階まで被害を受けていました。女川町に行く、町の中心部は全て

礫だけが残っていました。これらも、私にとっては一生忘れられない光景です。その後、山梨大学の附属小学校に行った帰路に、御嶽山の噴火と遭遇したり、東京電力福島原子力発電所の周辺自治体へのスタディーツアーに出かけたりもしましたが、こうした私自身の経験を、附属小学校の校長をしていた時には、11月5日の津波防災の日に因んで、防災の学習を目的とした集会で、自分が撮影してきた学校などの被災地の状況の写真を使ったPPPをもとに、「校長先生が見てきた東日本大震災」という話をしました。子どもたちは、一言も私語をせず、じっと私の話を聞いてくれました。

以上のことから、NIEの活動と防災・減災教育の取り組みを考えると、第一に、子どもたちは震災の恐ろしさを体験としては知りませんが、まずはデジタル版の新聞などを活用して、報道された震災の具体的な事実を主体的に調べ、理解することです。さらには、復旧・復興に向けてどのような取り組みが行われたかや、地震や津波のメカニズムについても認識を深めることが、いずれ南海トラフ地震にかなりの確率で出会うことが予想されている子どもたちにとっては、「生きる力」として求められる学びとなるでしょう。

第二に、こうしたデジタル的な学びと同時に、震災そのものの経験者や私のような見聞きしてきた者のリアルな話を結びつけることです。その際、こうした震災の取材を経験した記者の方に「出前授業」で来てもらい、記者だからこそ得られたリアルな事実や知見を話してもらうことは深い学びに必ずやつながることでしょう。

第三に、話を聞くだけでは受け身的な学習になってしまいがちなので、自分たちが調べたことや考えたことを、自分たちなりに創意工夫した新聞にまとめて、行動や態度につながる「生きた知識」に発展させていくことです。

南海トラフ地震の被害が予想されている和歌山県だからこそ、家庭での対話も含めて、こうした防災・減災に向けての取り組みを日常的に進めていきたいですね。

# 和歌山県中高 NIE実践セミナーに参加して



県立向陽中学校 教頭 樋上 睦芳

本校で開催されたNIE実践セミナーに参加させていただいた。前半は4校から実践発表があり、それぞれ工夫を凝らした実践に学ぶことが多く、たいへん参考になった。新聞記事について、グループで討議を行う実践例が多くあり、主体的に対話的な授業づくりが浸透してきていることを実感した。また、SDGsの目標ごとにファイルして閲覧可能にしたり、新聞記事から問題を作成したり、新聞の可能性を十分引き出しておられる実践ばかりで、各校の先生方には生徒のために尽力されていた。後半は「阪神・淡路大震災29年」と題して、神戸新聞

NIE・NIB推進部シニアアドバイザーの三好正文氏より、基調提言があった。私も、当時兵庫県内に住み地震も経験したこともあり、大変興味深く聴かせて頂いた。地震発生当日、神戸新聞社の印刷工場は被災し操業できない状況となったが、京都新聞との間に災害協定があり、その日の夕刊から発行できたこと、復興について伝え続けることが新聞社の役割であったこと、被災者に必要な情報を伝えること等、被災者に寄り添いながら、大きな使命感を持って発行されていたことを知った。思いがこもったものには心を打つチカラがある。実践セミナーで

は、多くの方の思いのこもった取り組みから、生徒や読者の心を動かす素晴らしい発表ばかりであった。

さて、本校では、実践セミナーで報告させていただいたように、国語科の中で読み比べを実践している他、終わりのホームルームでその日にあった記事や、新聞係が紹介している。係の生徒は、新聞記事全体に目を通し記事を吟味し、クラスメイトの興味を惹く記事を選定し紹介しなければならぬ。この取り組みの中で、全ての記事に目を通すという作業は、今の時代に大切な作業であると感じている。それは近頃、選挙の結果にSNSの戦略

が大きく影響するといふニュースを聞いたことから、更に気持ちは大きくなった。ネット社会では、自分の興味関心に従って、自分の意見や願望に合致する情報ばかりを集める心理傾向がはたらく。この傾向を「確認バイアス」という。

また、その中で似た考えの人と繋がるうち、「自分達は正しい」との考えが強化され、一面的な考えに固執してしまうことがある。ネット社会では、自分を肯定したいがために、自分の考えに合わないものを排除する考えの傾向になりがちである。そうならない様に学生時代から「確認バイアス」の存在を理解した上で、ネット記事や新聞の記事にふれる必要がある。新聞には多様な分野の記事があり、新しい情報の他に、新しい情報以外の情報等にもふれることができる。紙の新聞についてもデジタル化が急速に進んでいる。新聞にふれる機会を創出したりメディアリテラシーについて考

えたりすることは現代を生きる子どもにとって大切である。2024年10月22日付、読売新聞掲載

『教科書「紙」に回帰 スウェーデン端末重視で学力低下』スウェーデンでは世界に先駆け授業のデジタル化が進むにつれ、子ども達の集中力が続かない、考えが深まれない、長文の読み書きができない…といった子どもの変化が見られた。実際に、22年の国際学力到達度調査(PISA)の結果も芳しくない。紙の教科書の普及を図っている。

この記事を見つけた。日本は現在、デジタルと紙を併用する方向性である。どちらが良いといった一元的なことではなく、メリット・デメリットを理解した上で、使用していくことが大切だ。紙の情報媒体の代表といえる新聞が今まで果たしてきた役割は大きい。ある意味、家庭における教科書は新聞であるともいえる。全体を俯瞰して世の中がど

うあるべきなのか、理想を追及し論じたり、地域から世界まで幅広く、深く知ることができたりする媒体が新聞である。この思いのこもった媒体を教育活動で活用しない手はない。



実践発表する県立向陽中の貴志佳永子教諭



シンポジウム「防災・減災とこれからのNIE」の様子

# 開智高等学校新聞部の 活動と取り組み

開智高等学校新聞部顧問  
松村 則子

開智高等学校新聞部は平均部員数5名(今年度は中学生3名、高校生3名が在籍)、いつも部員集めには苦労しますが、少数精鋭で頑張っているクラブです。長年校内のみで活動してきましたが、2021年に実施された第45回全国高等学校総合文化祭(全国総文)わかやま大会に向け、2018年に和歌山県高等学校文化連盟(県高文連)新聞部会が発足したことを機に、他校との合同研修会なども実施、参加するようになりました。また、全国総文にも2019年佐賀大会から参加しています。

最優秀賞や優秀賞などを受賞するいわゆる強豪校と、我々新聞部の力量が大きくかけ離れている点でした。東日本大震災以来毎年取材に訪れている学校、学校新聞をきっかけに学校周辺の道路事情を改善させた学校、多方面への交渉の末、広島サミットの取材に成功した学校などに比べ、年2回の校内新聞発行が主なわが新聞部は、新聞部としての伝統、取り組む年数、生徒の熱量、部員のスキルなど、すべてにおいて大きな差を感じました。また、顧問自身も新聞作成に関して素人であり、レ

イアウトの基本や紙面の禁忌事項も知らない状況でした。(顧問の勉強不足・指導力不足により現在も状況はほぼ改善されていません。反省。)

そこで、「部活動」という教育活動の一環という点から学校新聞が果たす役割は何かと考え、開智高校新聞部では2つの目標を定めて活動することにしました。まずは、新聞作成により生徒の見識を広め、文章力や構成力、コミュニケーション力といった生徒個人の力を向上させること。次に、生徒の活動や学校所在地である和歌山について記事にすることで、校内活性化並びに地域理解に寄与することです。

一つ目の生徒個人の力を向上させるためには、とにかく新聞を書くことを優先し、個人的に興味を持った分野でも良いので新聞を各自に作成させています。全体への情報発信という点では内容に偏りがあることは承知していますが、まずは発信したい内容について調べ、レ

イアウトなどを意識した紙面作りをさせています。部員が興味を持った内容であったとしても、それに反応してくれる生徒たちも多く、部員のモチベーションにつながり、構成力や文章力の向上につながっています。

二つ目の校内活性化・地域理解に寄与する点では、文化祭や体育祭の特集記事の作成と外部取材の活動を行っています。校内活性化を目指し、行事や部活動、生徒を取り上げた紙面も作っています。和歌山県をテーマにした内容の方が読者の反応も良いので、現在は和歌山県内の紹介記事を中心に据えています。開智新聞部のみでの外部取材を年に複数回、県高文連新聞部会で行う2回の研修会を組み合わせて、和歌山県の産業や歴史に

スポットを当てて取材しています。これまで取材したものは「湯浅町伝統的建造物群保存地区」「読売新聞和歌山支社」「和歌山電鐵貴志川線」「紀州東照宮」「こくぼ農園(無農薬バナナの栽培)」「黒沢牧場」「中野BC」「おいけの窓(一ター・Uター)による地域活性化」「伊太祁曽神社」「和歌浦天満宮」「万葉館」「めでたい電車(南海電車)」「淡島神社」「紀三井寺」「A-GIRLS(和歌山の繊維企業)など、歴史と産業を中心としたものです。取材先の方だけでなく観光客などにも取材を行うことでコミュニケーション力や質問力を鍛えています。和歌山の学校に通いながら(住みながら)も和歌山について知らない生徒も多く、「新聞を読んで初めて知ったわ」という周囲の声を耳にし、地域理解に少しは貢献できているかもしれないと部員達は喜んでいます。一次、どこに取材に行く?」を合い言葉に、和歌山について調べ

る日々を部員達も楽しんでいきます。

また、各校それぞれで活動するだけだった新聞部が、わかやま総文を機に部会として研修会を行うようになり、近大和歌山高校や向陽高校の皆さんと交流する機会を得たことも部員の楽しみになっています。研修会には中学生も一緒に参加し、高校生も手ほどきを受けながら新聞作成を行っています。体育系クラブは他校がライバルとなりますが、新聞部会は共に紙面を作成する仲間として活動できるのが良いところです。



開智高新聞部の活動の様子



# 「いっしょに読もう！新聞コンクール」の審査結果について

## 全国奨励賞

北野 瑞葵さん(和歌山市立宮小学校6年)

三原 苺夏さん(和歌山県立日高高等学校附属中学校1年)

## 学校奨励賞

和歌山市立高松小学校

西牟婁郡白浜町立日置小学校

和歌山県立日高高等学校附属中学校

和歌山県立和歌山東高等学校

このたび日本新聞協会から、第15回「いっしょに読もう！新聞コンクール」全国審査会の結果が公表されました。全国から6万1,576編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各1編(合計3編)、優秀賞を校種別に各10編(合計30編)、奨励賞を120編選んだと発表がありました。また、団体応募校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各校の合計15校、学校奨励賞190校が選定されています。

また、第16回「いっしょに読もう！新聞コンクール」は2024年9月9日から2025年9月7日までの新聞記事を対象にして実施され、作品の提出締切りは、2025年9月8日(月)です。多くの学校、多くの児童・生徒の皆さんの参加をお待ちしています。

への応募用紙や応募書類をお送りしますので、事務局メールアドレス(nie@kiiminpo.jp)にて、希望する内容や質問をお書きのうえお送りください。

日本新聞協会NIEホームページ(<https://nie.jp/>)に、募集要項の詳細が掲載されていますので、こちらをご覧ください。

和歌山県内では、小学校175編、中学校109編、高等学校76編で合計360編の応募がありました。そのうち県審査会において、優秀賞に21名、奨励賞に26名を選定しました。

なお、当コンクールは県内の多くの応募校が、学級や学年単位で参加してくださいとしています。授業での作文指導の実際や新聞記事を選ばせる方法など興味のある教員の方々には、参考資料や冊子、当コンクール

全国審査会で授賞された個人および団体、県審査会で授賞された個人の皆様、誠におめでとうございました。

和歌山県内では、小学校175編、中学校109編、高等学校76編で合計360編の応募がありました。そのうち県審査会において、優秀賞に21名、奨励賞に26名を選定しました。



北野 瑞葵さん



三原 苺夏さん

※写真掲載は保護者の了解を得ています

県内の各学校で作られた学習新聞、かべ新聞や調査研究ポスターなどを公開しています。

## わかやま デジタルかべ新聞パーク

### 第2期(2025年4月から) 作品募集予告

児童生徒が授業で作成した、かべ新聞、学習新聞、調査研究ポスターなどを募集しています。授業で作成した児童生徒作品を、学年運営や学級経営の記録として、ウェブ上でいつでもどこでも鑑賞できるようにしてみませんか。「わかやまデジタルかべ新聞パーク」は、そのような「デジタル作品展示会」の会場をウェブ上で提供しています。興味のある教員の皆様は、下記アドレスをご覧ください。たくさんの作品の応募をお待ちしています。

[https://nie.kiiminpo.jp/wall\\_news\\_form/](https://nie.kiiminpo.jp/wall_news_form/)



©和歌山県NIE推進協議会